

第11章 考察

第1節 瓜破台地周辺における石器群の様相

～原材料の搬入と技術変異のあり方について～

1 はじめに

まず八尾南遺跡第6地点の接合資料に関する2、3の問題を検討する。それは、①接合資料中に認められた剝片の分割技術の定義・詳述、②ナイフ形石器の製作に関わりのある剝離技術の分類・記載である。そしてこれらを総合し、第6地点における石器製作の様相を改めて概観する。

次いで先の分析結果を踏まえ、長原遺跡の石器群との比較をおこなう。この比較作業はおもに原材料の搬入状況・剝離技術に関するものである。比較基準は主として第6地点の接合資料であるが、それとても部分資料である点には注意を要する。とはいえ、接合資料は剝片同士、あるいは剝片と石核との接合状況から剝離の順序をほぼ確実に追うことができ、部分的にではあれ技術構造(とくに樹形的な石器製作の流れ)を鮮明にできる。この点、剝片と石核、あるいは剝片とツールとの関係を妥当な範囲内で推測しなければならない非接合資料とは異なっており、比較上の定点を決めるうえでは有意と考える。幸い、良好な接合資料が長原遺跡のいくつかの石器群で知られており、これが比較対象となる。

2 八尾南遺跡第6地点の様相

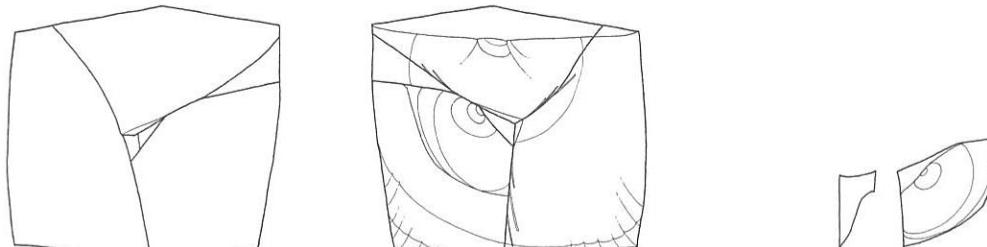
(1) 剥片の分割技術

この点については報告書のなかで、すでに簡単な記載がおこなわれている。まずはその条を引用しておこう。それによれば、「・・・亜円礫から複数の板状剝片を生産し、その剝離面上を急角度に加撃して折りとり、あるいは割りとて形成された剝片」を素材に用いた削器が認められるという(山田編 1993 P.59)。筆者らがおこなった接合資料の検討においても、明らかに意図的に分割した剝片が含まれているのを再確認したわけである。

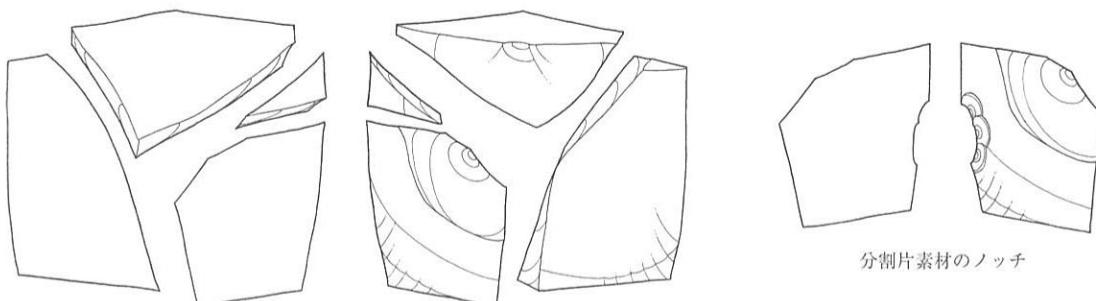
ここで意図的と判断できる根拠としては、①折れ面から派生する毛細管状の亀裂、②おもに背面側に残る明確な打撃クラック、③平坦面上の1点からY字状・X字状に分岐しつつ縁辺にいたる折れ面、④2~6片程度の分割片数¹⁾などが挙げられる。こうした特徴のうち、①は単なる折損剝片にも認められるが、②や③との複合例となるとかなり限られてくる。とくに①~③の特徴を具有し、なおかつ接合状況から打撃位置を示す空白部が明らかな場合は、意図的な分割処理を経た蓋然性が高い。具体的には、特徴②が打撃時の破碎を示す空白部に近接し、その部分に①・③が収束するような状況は、偶発的・非意図的な折損状況とは明確にその性格が異なるといえよう。

このように、少なくとも2片以上に折れているうえに特徴②か③を併せもつ单位を、本稿では「分割剝片」と呼称したい(図123)。表82に分割剝片と認定した単位を14例示した。このうち、明確な打撃痕跡を残す典型例は2-14・69-15・84-6の3例であろう。以下、それぞれについて改めて記載する。

2-6は背面中央部に打撃クラックをとどめ、少なくとも6片以上に分割されている。腹面側では背面の打撃クラックに相対する位置から明確な打点をもつ剝離が始まっており、打撃とそれにともなう反作用の結果と考えられる。つまり、反作用を引き起こす何か(例えば台石など)の存在が考慮される。



接合状況(上)と分解図(下)

打撃直下の空白部に
対応する剥片

分割片素材のノッチ

図123 分割剥片の模式図

表82 分割剥片の属性

単位番号	毛細管状の亀裂 ①	打撃クラック ②	Y字状折れ面 ③	破断片数 ④	打撃に伴う空白部	打撃位置	分割の方式	分割の認定	石器への利用
2・2	背面		あり	3	あり	背面中央部	D→V	◎	石核素材
2・7	腹面	背面	なし	3	あり		不明	△	ノッチ素材
2・14	背面	背面	あり	5	あり	背面打面側	D→V	◎	
3・8			あり		あり	背面中央部	D→V	◎	
20・3	背面	背面(棱上)	あり	3	あり	背面中央部	D→V	◎	ノッチ素材
27・6	腹面	不明	2<	不明		腹面	V→D	◎	削器素材
27・12			あり	4				△	
37	腹面		あり	5	あり	背面中央部	D→V	◎	
52	腹面	背面	あり	3		背面中央部	D→V	◎	
69・15	背面	背面	あり	6	あり	背面中央部	D→V	◎	石核素材
87	背面		あり	5	あり	背面中央部	D→V	◎	
84・6	腹面	背面	あり	5	なし	背面中央部	D→V	◎	RF素材
84・10			なし	2		不 明	不 明	△	
100・5			あり	3	あり	不 明	不 明	◎	

分割の方式：「D→V」は背面から腹面側へ、「V→D」は腹面から背面側への打撃を示す。

分割の認定：「◎」は接合状況から分割が確実な例、「△」は分割を経た可能性を示す。

表83 工程Ⅰ(I～Ⅲ類剥片)の折損状況

	横位折損	縦位折損	垂直割れ	分 割	不 明	完 形	合 計
度 数	9	4	29	16	1	49	108
相対度数(%)	8.33	3.70	26.85	14.81	0.93	45.37	100.00

折損状況の重複例（3例）を除けば、工程Ⅰにおける折損率は $(55/105) \times 100 = 52.38\%$ となる。

表84 IV類剥片とその石核の折損状況

	横位折損	縦位折損	垂直割れ	石核折損	完 形	合 計
度 数	4	1	5	8	26	44
相対度数(%)	9.09	2.27	11.36	18.18	59.09	100.00

69-9も背面中央部に打撃による空白部が見られ、X字状の折れ面がそこで交差している。この単位の構成要素である小単位69-15dは石核とみたが、作業面に見立てた剝離面がちょうどこの空白部に面していることを考慮すれば、分割時に同時形成された可能性も捨てきれない。

84-6は背面中央部に打撃クラックをとどめ、近接する部位から放射状に折れ面が拡散している。分割片は5点を数え、うち1片に急斜度調整を施している（角錐状石器）。

ここで、分割例とその他の折れ（垂直割れなど）とを比較しておきたい。この場合、接合状況から先に述べた認定基準②～④を満たす単位についてのみ分割によるものとし、残余はすべて剝離時の折損例とみなしている。折損状況は「横位折損」、「縦位折損」、「垂直割れ」、「分割」に分け、これら「折損例」と「完形」との構成比も併せて比較する（表83）。合計108単位のうち、「完形」とみなせたのは49単位（45.4%）認められた。したがって、「折損例」は50%をやや超えている。各カテゴリで最も度数が大きいのは「垂直割れ」の29点（26.9%）である。これに次ぐのが「分割」の16点（14.8%）で、「横位折損」、「縦位折損」はともに10点に満たない。じつのところ、すべての折損例のうちでこの「分割」例が占める割合の大小を測る基準はない。ただ、通常の石器群では異例ともいえる折損状況が「垂直割れ」に次ぐ頻度を見せている点は注目に値するものと考えられ、さらなる検討も必要とされる。

一方、ツール（削器・ノッチ）や石核素材への転用状況はというと、14例のうち削器・ノッチの素材が3例（2-7・20-3・27-6）、石核素材が2例（2-2・69-15）、2次加工ある剝片が1例（84-6）となる。27-6以外は分割片同士がほぼ密着接合し、本来の剝片の姿に復したものである。空白部の目立つ2-14・3-8は、その部分が何らかのかたちで利用された可能性も残る。

このような事実に接合状況も加味して考えるならば、剝片の分割は非意図的・偶発的な事故によるものではなく、明らかにツールや石核素材の準備を意識したものといえる。より具体的には、削器・ノッチなどの素材には大きすぎる剝片を分割し、適当な分割片を選んで石器製作に供するという流れが認められる。分割片の大きさは一定でなく、1単位分の剝片につき分割片は2～6片程度である。このうちツール・石核となるのは1個体であることが多い。これらの事実は八尾南遺跡第6地点の石器群を特徴づけるものとして注目に値する。以下、剝片の意図的分割を「分割技術」と呼ぶ。

（2）第2工程

次いで、ナイフ形石器の製作に関わりのある剝片素材石核と、それらから剝離した剝片の特徴をまとめておきたい。おもに石核素材となったI類剝片が、他の類型に比し大形・厚手である点はすでに指摘した通りである（第9章第2節参照）。ただ、I類の中でも大小の変異が見られ、とくにその形態に応じて石核としての用い方が若干異なっている点には注意しなければならない。端的にいって、石核素材が薄手である場合はポジティヴ面側のみを作業面とするのに対し、やや厚手かつ厚さがほぼ均一のときは打面・作業面を適宜交替させることで効率よく剝片を剝離している。これらふたつの剝離技術をまとめると次の通りとなる（図124）。

剝離技術A I類剝片のポジティヴ面を作業面とし、ポジティヴ・バルブをとり込むかたちで剝片を剝離する。石核素材の周囲を巡る自然面や折れ面が打面となる。明確な打面調整を施すことはなく、石核が薄手のため背面側での剝片剝離もおこなわない。剝離はポジティヴ面に対しほぼ水平になれるため、作業範囲とポジティヴ面とを明確に画する交線が認められず、剝片の形態を決定づける要素に乏しい。剝離状況は平坦剝離に近い。したがって、第1剝片は背面がポジティヴ面のみからなり（74-a・

96-1 a・96-2 a)、第2打以降の剥片は先行剥離痕を一部にとり込んだ不整形状を示す(3-2 a・74-k・96-2 eなど)。ポジティブ面のとり込み方も一定せず、必ずしも末端部に付着するわけではない。石核素材は小形であり、手数が少ないと素材の大きさをほぼ保っている。

剥離技術B I類剥片を石核素材に用い、打面・作業面を適宜交替させながら剥片を剥離する。複数の剥離痕が切り合うことで形成された稜線上に打撃点を定める例が多く、打面調整を施して打面を山形に整形する場合もある(72-a・72-b・73-a)。石核素材の表面に自然面をとり込んでいない場合は打面・作業面の交替を図っており、そのうち一方は専ら目的剥離時の打面として機能していた可能性が高い。作業面と石核素材のポジティブ面(あるいはそれに相当するネガティブ面)の間にはほぼ直線的な交線が走り、両者の境界を明確に識別できる。剥片のかたちはこの稜線に沿う横形となり、ポジティブ面を帯状にとり込むことで末端縁は直線状～弧状を呈する。つまり、剥片のかたちを決定づける要素は脊梁状の交線と、背面末端部の平滑面である。また、石核素材は概して厚さ1.5～2.0cm程度の大形剥片とみられ、IV類剥片に付着するポジティブ面はきわめて平滑である。こうした例にかぎり、有底剥片と呼ぶことも可能である。

両者の代表例についてより詳細に記載しておきたい。まず、剥離技術Aの石核であるが、代表例として挙げられるのが3-2 b・96-2・132-4である。3-2 bは末端側を折損したI類剥片の打面側に作業面を設け、ポジティブ面から3枚の剥片を剥離している。打撃位置は先行剥離痕を避けるかたちで横方向に移動しており、ポジティブ面を広くとり込むのにほぼ成功している。第3打で石核が折損している。96-2は石核素材(I類剥片)の周囲を巡る自然面を打面とし、ポジティブ面から6枚の剥片を剥離している。石核素材の片側縁には自然面が付着しておらず、ポジティブ面から剥片を得られる状況はない。作業範囲がポジティブ面の右半分に限られるのはそのためであろう。石核自体は折損しているが、これは第6打目で発生している。132-4は背面が自然面のみからなるI類剥片であったが、ポジティブ面にはほぼ沿う浅い剥離によって数枚の剥片を得ている。石核としては何ら破損していないが、作業範囲はポジティブ・バルブ周辺に限られており、あたかもバルブ付近での剥離が終了した時点で石核としての役目を終えたかのようである。

剥離技術Bの石核としては、接合資料No.73の単位73-nを例示しておきたい。No.73は最大厚1.7cm程度の厚手の剥片を石核素材とし、打面側から剥片を連続剥離した接合資料である。ポジティブ面側での剥

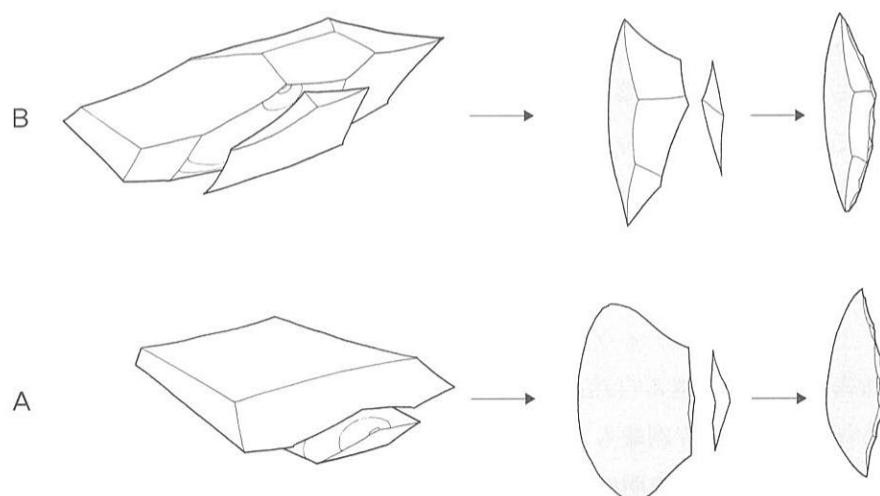


図124 剥離技術A・B模式図

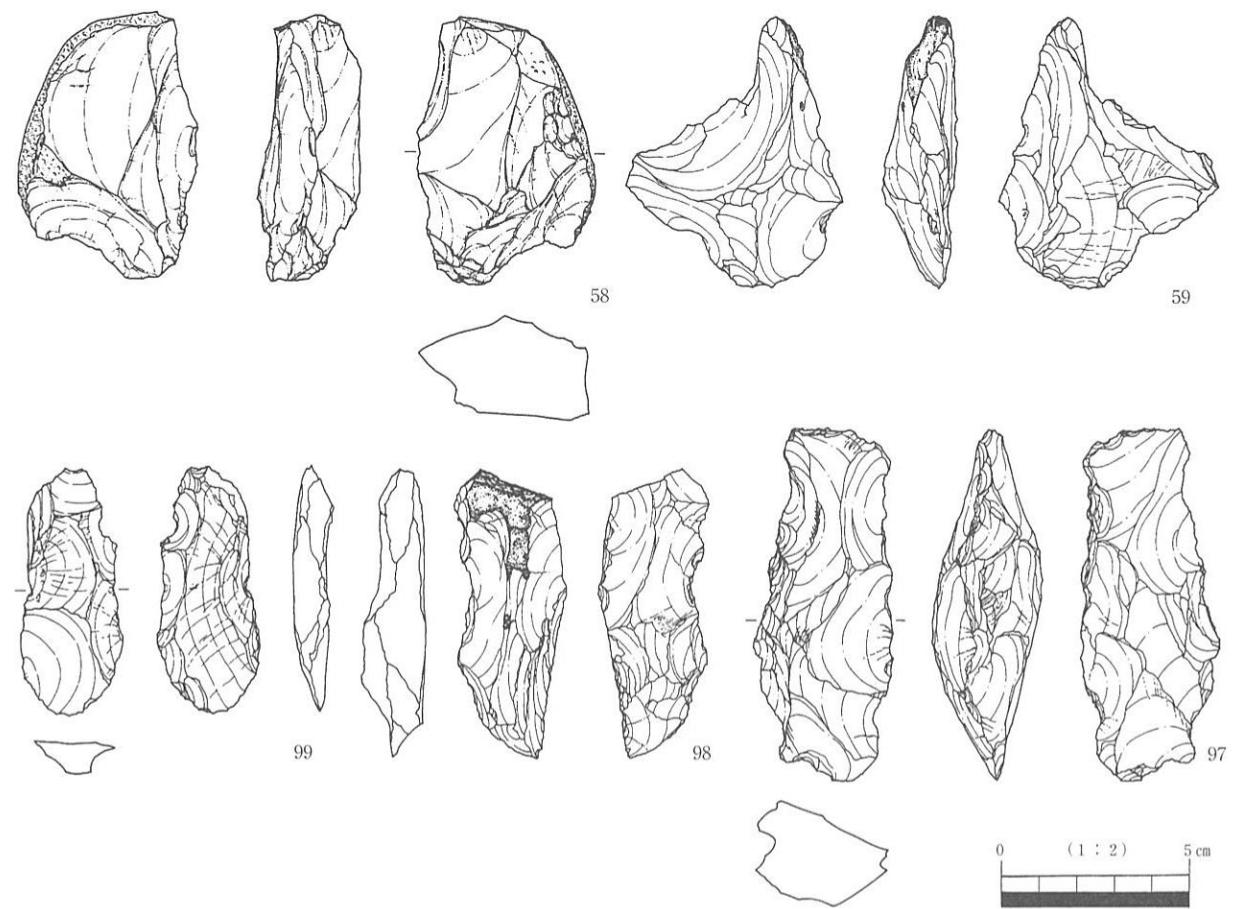


図125 八尾南遺跡第6地点の石核

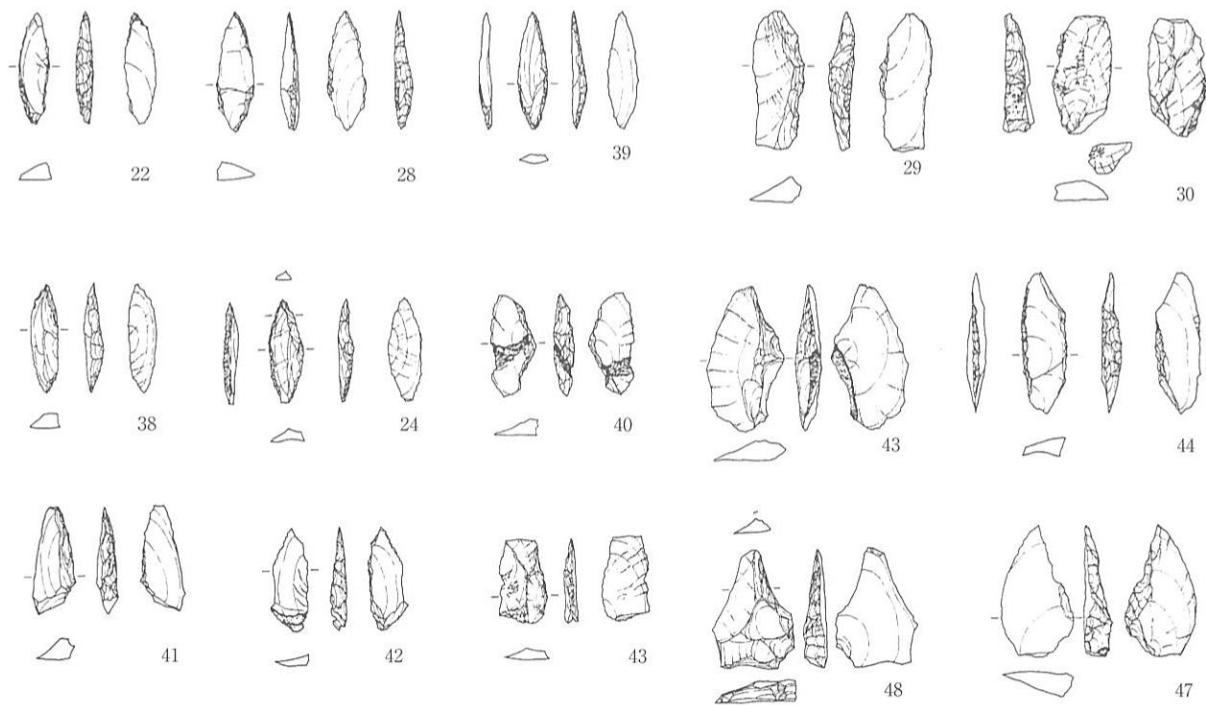


図126 八尾南遺跡第6地点の石器

離後、打面・作業面を交替させて石核の表面からさらに数枚の剝片を得る、という過程を最低2度繰り返しており、表面での剝離は打面調整を意図したものと考えられる。73-nの裏面(ポジティブ面)側には目的剝離とみられる剝離痕73-k1～k4が残り、それらを打面とする剝離痕73-1～73-mが山形の打面を準備している。石核は折損しているが、これは裏面での剝離を試みた際に生じたものと解釈できる。また、図示しなかったが接合資料No82もこれに類似する剝離経過を示している。No82も厚さ2.0cm程度の扁平な大形の剝片を石核素材としているが、剝離時に垂直割れで2片に分断している。双方を石核に用い、打面・作業面を適宜交替させて剝片を剝離しており、ともに10～13小単位のIV類剝片を得ている。ちなみに接合資料No73は手数の多さもあり、石核本来の大きさは判然としない。

このほかにも非接合資料の報告遺物の中に、打面・作業面の交替をおこないつつ剝片を剝離した石核が含まれている(図125)。いずれも石核素材の背面には平坦なネガティブ面をとり込んでおり、とくに両側縁に作業面を併設している点で類似する。また、裏面側(ポジティブ面)に最終剝離痕が残っており、表面(素材の背面)側の剝離痕はやや山形をなす打面を準備していることから、打面調整の意味をもつものと考えられる。

このように、ふたつの剝離技術は得られる剝片の形態・剝離回数の点でも大きく異なっている。剝片の形態差はかたちを決める稜線の有無、いいかえれば作業面と石核底面とを区別しつつ剝離作業を進めるのかどうかに依存しており、石核の使用可能な容量をいかに消費するか、さらにいえばポジティブ面のとり込み方と密接に関係しているようにみえる。例えば剝離技術Aでは、石核の周囲を巡る自然面・折れ面を打面とするため、結果としてポジティブ面が消失することはあっても石核素材の長さ・幅を著しく損なうことはない。その一方で剝離技術Bの石核では、石核自体を断ち切るかたちで剝離が進行するので、おもに剝離の進行方向での縮小が著しい。つまり、石核素材のかたち・大きさに応じてポジティブ面(あるいはそれに相当する平坦面)のとり込み方に変異が認められる。とはいっても、サスカイト製ナイフ形石器には背面にポジティブ面をもつ剝片を多用する状況も考慮するならば、両者は本質的に異なる技術ではなく、ただ目的意識の表現形が違っているにすぎない。

さて、小形剝片の剝離技術を大別2種に分類したわけだが、両者の差は接合状況にも如実に表されている。剝離技術Aの石核は基本的に他の剝片・石核と接合しあうことでひとつの母岩に戻るのに対し、剝離技術Bの石核は石核素材の生産段階での接合関係が少ない。いいかえれば、剝離技術Bの石核はおもに工程IIの範囲内での接合関係しか示していない。すなわち、石核素材の生産→ナイフ形石器の製作までのプロセスが遺跡内で完結している(それゆえ接合資料の構成材料となる)剝離技術Aの石核と、少なくとも遺跡内で石核素材を準備した形跡がやや不明瞭な剝離技術Bの石核とは、目的が同じであっても辿ってきたプロセスが異なる可能性もある。

また、この点は接合資料に含まれない石核も例外ではない。例えば、図125-59・97については、遺跡内の石核素材生産をほとんど想定できない。現状での長さ・幅および重量は比較的大形ではあるが、それでも石核素材の本来的な大きさをほぼ失っており、同時にポジティブ面の残存範囲(裏面下端部)も著しく狭まっている。ちなみに厚さは2.7cmを測るが、これに匹敵する厚手のI類剝片は今回とり扱った接合資料群の中に認めることができなかった。接合資料No69、同84の母体となった大形・厚手の剝片に匹敵しうる大きさをもつ剝片が、石核素材として選択的に用いられていた可能性を示唆しているともいえよう。

石材の搬入・搬出に関するもうひとつ重要なのは、工程I段階の接合資料における石核の有無である。

この点については第9章第2節ですでに述べたが、再度強調しておきたい。工程Iの内容を示す接合資料(No.2+80・No.3+4+7・No.20+22・No.27・No.28・No.69・No.84・No.100・No.105・No.132の10例)の第1長～第3長の積を仮に母岩の体積とみなし比較を進めてみたところ、350cm²未満のもの(No.28・No.105・No.132)と400～1150cm²のものとに二分できた。そして、前者には工程Iの石核が含まれるのに対し、残余の接合資料はその石核を欠いていることが判明した。つまり、母岩が小さい接合資料(3例)は遺跡内で母岩の消費が完了している。体積400～1150cm²とされた接合資料における石核の行方については慎重であるべきだが、単なる接合可能性の見落としだけに帰される問題でもない。

まとめると次の通りとなる。ナイフ形石器の素材を作りだす剝離技術は2種類(A・B)に分類できる。前者は石核調整を施さずポジティヴ面から1～数枚の剝片を剝離するもので、接合状況からは遺跡内で石核素材の作出→石核としての利用が完結している。一方、打面・作業面の交替をおこない、打面調整も施して剝片を連続剝離する剝離技術Bは、石核素材を遺跡内で準備した形跡が希薄であり、それ自体が遺跡外からもたらされた可能性がある。

(3) ナイフ形石器との関係

前節では接合資料の検討を踏まえ、ナイフ形石器の素材生産には2種類の剝離技術が認められることを述べた。それは石核と剝片との関係から想定できたことである。次いで、剝離技術A・Bそれぞれが、ナイフ形石器といかなる関係にあるかが問題となる。以下、剝離技術A・Bとナイフ形石器とのつながりに触れるが、両者の接合資料を欠く現状にあっては推測の域にとどまることに注意する必要がある。

筆者の検討では、ナイフ形石器は40点出土している(図126)。いずれもサスカイト製で、素材剝片の打面側を基部とした1例(27-30)を除けば、残余は打面を背部整形で除去して切出形・柳葉形とした例からなる。素材の背面構成を見ると、①明確なポジティヴ面をとどめた例(5点)、②これに相当する平滑な大剝離面を一部に残した例(13点)などがある。平滑な剝離面はポジティヴ面かネガティヴ面かの判別が困難な場合を含むもので、いずれにせよ板状をなす石核から得た剝片を用いたものであろう。なお、③ネガティヴ面を疑似的な底面とした例(13点)も認められる。これらはいずれも幅広～横長の剝片を素材としたもので、素材の末端縁～側縁を刃部とする。剝離技術A・Bとの関係が問題となるのは、上記①・②であろう。石核・剝片との接合資料を欠くため確言はできないが、素材の背面がポジティヴ面のみからなり、先行剝離面をもたないナイフ形石器(25-13・28-44・29-47)は、剝離技術Aによって素材を生産した可能性がある。

その一方で、①・②に該当するうえに先行剝離面と「底面」との間に直線状～弧状をなす稜線をもつナイフ形石器は、とくに剝離技術Bと結びつくようにみえる。先行剝離面は概して素材の打面側にあり、ポジティヴ面およびそれに相当する大剝離面を切っている。このことは剝離の軌跡がほぼ一定方向に後退したことを示すもので、前述した剝離技術Bの特徴と一致している。

このような推定が妥当であるならば、剝離技術A・Bは剝離回数や打面調整の有無などの点で大きく異なっているにもかかわらず、その意図は本来同一であると考えられる。また、技術的変異の背景には用いた石核素材の大きさが関係しているようにみえる。ナイフ形石器の長さは完形値で3～5cmと小さく、素材剝片の大きさに関して確固たる規制が働いたとは思われない。要は幅3～5cm程度の剝片を得るに十分な容積が石核の側にあればよいのであって、剝離の進め方・効率は用いる石核素材の大きさ・形状に応じて大いに変動しうる。必要な剝片が小さい場合は、それらを得る状況が増加するがゆえに技

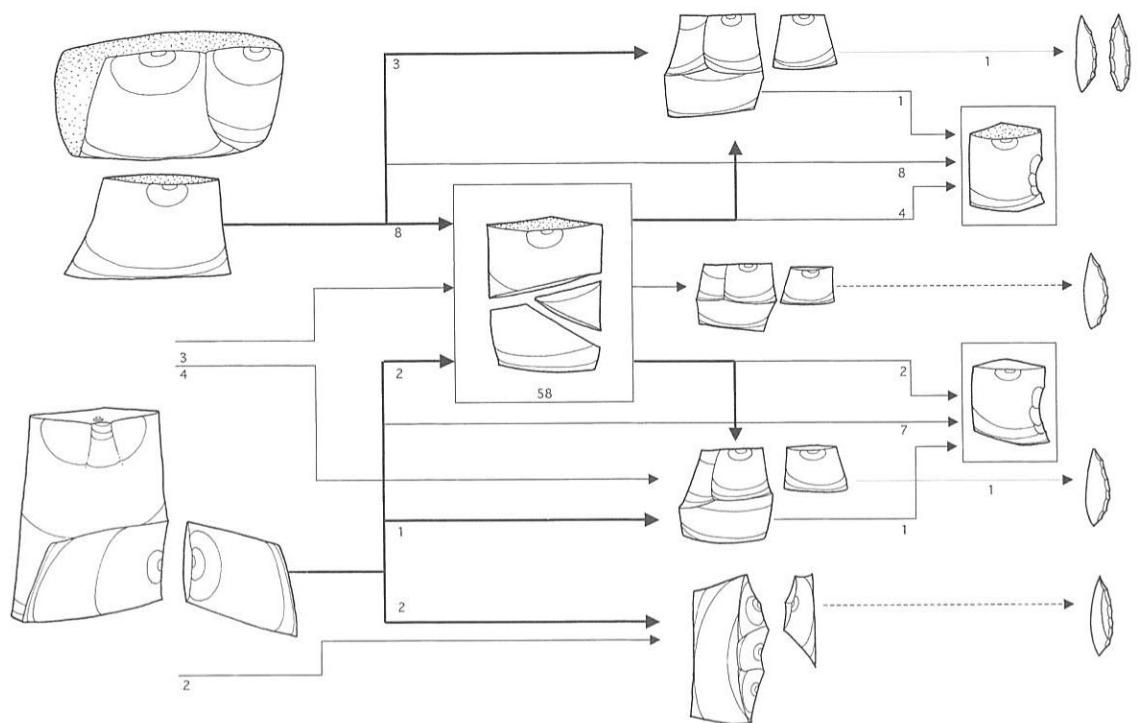


図127 八尾南遺跡第6地点の技術構造

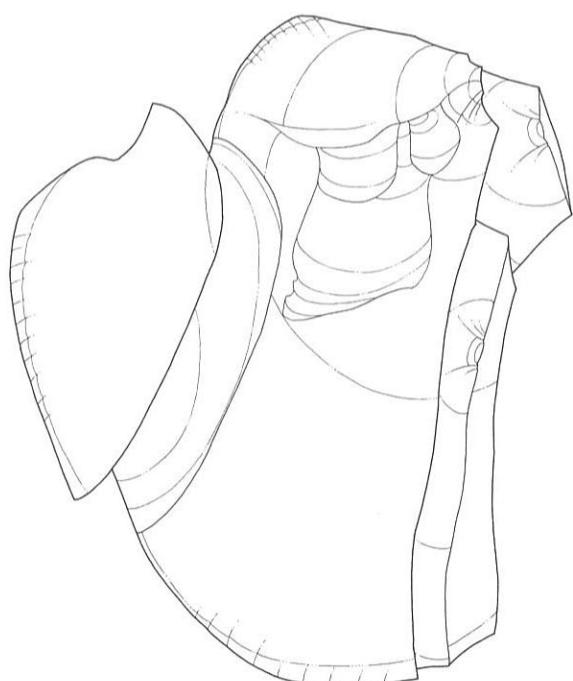


図128 接合No.69の素材復元図

術的なヴァリエーションも増えるのである。ただ、要件として重要なのは平坦な石核素材面の付着であり、基本的にはその実現が意識されていたことも想像に難くない。

このほか、ナイフ形石器に次ぐ定形石器としては「角錐状石器」が知られている。これは厚みがほぼ均一な素材を用い、ナイフ形石器の背部整形と同様の調整を加えて柳葉形に仕上げた石器で、4点出土している。石核・剝片との接合関係は知られていないが、その「未製品」が接合資料No.3+4+7・No.84に含まれている(3-6a・84-6a)。3-6aは長さ約70mm、幅約130mmを測る大形のI類剝片を石核とし、その背面側から得た剝片を素材としている。一部に自然面を残すが、片側縁を対向方向の急斜度調整で整形し、相対する縁辺の一端に背面側からの調整を施している。調整は周縁を半周するのみであるが、尖頭部をもつ。また、84-6aは分割剝片84-6の1片を用い、1端を折損するものの両側縁に急斜度調整を施している。ともに鋭利な縁辺をもたないことからナイフ形石器とは考えられず、調整の施し方からは「角錐状石器」との関わりを推測できる。ことに84-6aが分割剝片の一部を素材としている点は興味深い。

(4) 技術構造と原材搬入の状況

それでは前述の分割技術による削器類・石核素材の作出過程と、ナイフ形石器の素材を作りだす剝離技術A・Bとが技術構造のなかで占めている位置について考えてみたい。

別途記載した接合資料の内容に基づき、八尾南遺跡第6地点における技術構造を模式図にまとめてみた(図127)。製作工程の流れは大別2種類に分けられる。そのひとつはサスカイトの自然礫から直接的にI～III類剝片²⁾を剝離するもので、もうひとつは先の自然礫に匹敵する大きさの剝片からさらにI～III類剝片を得るものである(接合資料No.69・同No.84)。さらにどちらに属するかが不明確な剝片が10点見られるが、これらの帰属は接合状況からは判別できない。

自然礫から直接剝離した剝片は60点を数え、このうち15点が削器・ノッチや石核の素材となる。ツールや石核素材にいたるまでの過程は複雑で、そのまま削器・ノッチの素材となったのは8点、同様に石核となった3点のほかにも、分割によって削器・石核の素材を作りだした例がある。中には石核を削器に転用した例もある。剝片素材石核は4点認められる。

一方、大形剝片から得た剝片は24点あり、このうち削器や石核の素材となったのは12点を数える。自然礫を用いた石器製作と同様に削器・石核までの過程は複雑で、そのまま削器・ノッチとなる7点・3点のほか、分割を経て削器・石核となる場合もある。

また、どちらの流れに属するかが不明確な接合資料も含めた場合、分割過程を経たのは13点となり、少なくとも計58片に細片化している。ただし、その中でそのまま削器・ノッチの素材となったのは6点、石核素材となったのは5点にすぎない。

技術構造の模式図を改めて眺めてみると、自然礫から直接剝片を得る石器製作の流れと、大形剝片を起点とする流れとではほぼ同様の展開を見せているのがわかる。しかも、ナイフ形石器の製作を目的とする流れと、削器・ノッチの製作過程とは明確に分化しておらず、分割技術も単にノッチの製作のみにつながるわけでもない。ただ仔細に見れば、ナイフ形石器の製作は大形剝片の準備→石核への利用というかたちで工程が分節化しており、この点では瀬戸内技法をはじめとするサスカイト製ナイフ形石器の製作工程と同様の構造を垣間見ることもできる。しかしながら、母岩の消費はむしろ削器類の製作が主体であり、場合によりナイフ形石器の製作をおこなっていることを認めなければならない。もちろん、石核

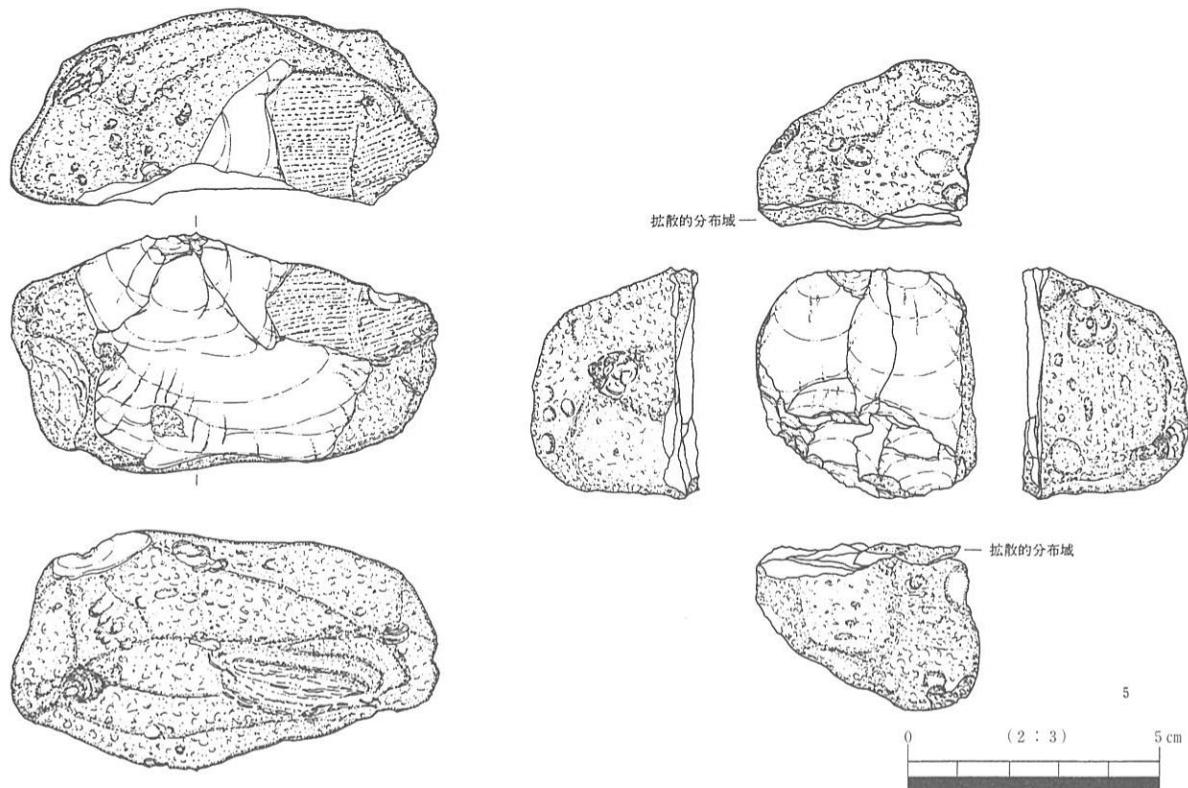


図129 「原礫集積遺構」の石核

素材を準備するための専用的な第1工程は存在しない。この点が八尾南遺跡第6地点における技術構造の大きな特徴のひとつである。

さらに、大形剝片(接合資料No.69・同No.84)がいわば自然礫と同じ役割を果たしていることにも注意が必要である(図128)。これらは自然礫を母体とする一部の接合資料より大きく、そして重い。拡散的分布域の中では「原礫・石核集積遺構」が確認されている(山田編 1993、図129)が、その場に残っていた自然礫の重量は499.0 g(「原礫1」)、318.0 g(「原礫2」)である。接合資料No.69・同No.84の総重量はそれぞれ387.0 g、510.6 gと、減損部分も考慮すれば十分に大形であることがわかる。接合資料中の剝片で重量が最大なのは単位2-2(184.9 g)であるから、No.69・No.84に比し著しく軽量である。また、これらは遺跡内での製作痕跡がきわめて希薄で、自然礫と同様に遺跡外から搬入されたものと解釈できる。これ以外に搬入された可能性が指摘できるのは、接合資料のなかでも母岩に復すことのなかったNo.73・No.74・No.82などであろう。特にNo.73・No.82剝離技術Bの石核に山形打面の剝片が接合したもので、当該地点が工程連鎖のいわば終着駅であった可能性も残る。

このほか、前述の技術構造には全く含まれない搬入品として、チャートの剝片が存在する。石核や碎片などで示される製作痕跡はきわめて希薄で、中には背面側に直線的な稜線を配した縦長の剝片も含まれている。当該地点に石器群を遺したヒトの別の側面を見るようで興味深い。

その一方で何が搬出されたかを考えるならば、まず想定できるのはナイフ形石器や削器・ノッチなどの持ち出しである。ただし、これらツールの搬出は何らかの物証をもって確言できるわけではない。接合状況から持ち出された蓋然性が高いと判断できるのはむしろ石核である。拳大程度の母岩から剝片を得たNo.28・No.105・No.132は遺跡内で消費が完結しているが、No.2+80・No.3+4+7・No.20・No.27・No.100(自然礫が母体)や、前述のNo.69・No.84は石核を欠いている。持ち込まれた母岩の大きさ(拳大~

幼児頭大)を考慮するならば、すでに母岩の大部分を消費しているようにみえるが、石核の不在は搬出によるものと考えるのが最も自然である。

(5) 小 結

八尾南遺跡第6地点における石器製作の様相を要約すると次の通りとなる。

遺跡内に搬入された原材は拳大～幼児頭大のサスカイト自然礫と大形剝片である。それらを石核とし、剝片を剝離して削器・ノッチを製作するが、同時にナイフ形石器・角錐状石器の製作もおこなっている。両者は母岩別に画然と分かれているのではなく、むしろ母岩によっては共存している。また、やや大形の剝片は分割し、目的に応じてツールや石核の素材に用いている。技術構造は複雑である。

ナイフ形石器の素材生産には2種類の剝離技術が関与している。石核素材のポジティヴ面に主要な作業範囲を定め、1～数枚の剝片を得る剝離技術Aと、打面・作業面を交替させつつ剝片を連続生産する剝離技術Bである。後者は山形の打面調整も施している。いずれも柳葉形～切出形を見せるナイフ形石器の素材を準備するものとみえ、石核素材の大きさ・形状に応じた技術的変異と考えられる。

3 長原遺跡との比較

前章までは八尾南遺跡第6地点における石器製作の様相について述べた。次いで検討するのは、隣接する長原遺跡の石器群との比較・対照である。各石器群で①剝離技術、②ナイフ形石器を主とするツールの様相、③推定される石材の搬入状況、④技術構造の4項目について検討し、八尾南遺跡第6地点との対比をおこなう。なお、良好な接合資料の少ない石器群との対比は今後の課題とし、長原遺跡89-37次・同97-12次調査地出土の石器群との対比を中心に比較をおこなうこととする。

(1) 長原遺跡89-37次調査地出土の石器群(89BH)

長原遺跡は大阪府大阪市平野区長吉川辺3-16に所在している。1989年度の発掘調査では合計692点の旧石器が出土し、それ以外に3,013点の微細石器遺物が捕集されている(趙編 1997)。

この石器群では合計88例の接合資料が復元されている。接合資料に含まれる資料数は286点で、水洗捕集の微細遺物も含めた接合率は7.7%である³⁾。八尾南遺跡第6地点の接合率(24.2%)のちょうど1/3にあたるが、これは母岩に復する接合資料が皆無であるためと考えられる。接合総数も11が最多(JBH-13)と少ない。また、自然礫から直接剝離した剝片をツールや石核の素材に利用した状況は認められず、八尾南遺跡第6地点の接合資料でいえば1単位分の剝片に復する程度である。いくつかの接合資料が同一母岩の可能性もあるが⁴⁾、それらが母岩分割時の剝離面を介して接合したケースはきわめて少ない。

剝離技術について詳しくみておこう。接合資料はいずれも厚手・大形の剝片を石核とし、おもにポジティヴ面側に主要な作業面を設定して剝片を得るパターンが多い(図130)。また、剝離時に山形の打面調整を施す例も目立つ。その具体例としては、石核と剝片の接合資料(JBH-1・JBH-3・JBH-13・JBH-28・JBH-44・JBH-46・JBH-49・JBH-81・JBH-84など)や、剝片同士の接合資料(JBH-50・JBH-73・JBH-22・JBH-25・JBH-15・JBH-64・JBH-65など)のほか、これらにナイフ形石器が加わる接合資料(JBH-2・JBH-24・JBH-48・JBH-51・JBH-52)などがある。打面はその中央部が突出するよう整形されるが、打撃点を左右に振幅して幅広の剝片を複数得る場合もある(JBH-13aなど)。また、剝片の背面末端部には平滑なポジティヴ面が帶状に付着しており、先行剝離面との間に直線状の交線が横走し

ている。そして、これに沿う末端縁は緩やかな弧状～直線状を呈する。

ナイフ形石器は32点出土している(図131)。おもに対向調整剝離で素材の打面を除去し、柳葉形に仕上げたものが主体で、チャート製の1点以外はすべてサヌカイトを用いている。長さは完形値で21.5～51.2mmの範囲に納まり、重量は0.63～6.69gまでの間に分布する。概して小形・薄手の横剝ぎナイフ形石器である。これらは八尾南遺跡第6地点の小形ナイフ形石器とほぼ同形・同大で、対向調整・内向調整で背部を整形するなど共通点が多く認められる。

また、注目すべきは分割剝片の存在である。実測図等は未掲載だが、筆者の実見では接合資料JBH14・16がこれにあたる。JBH-14はポジティヴ面打面側に打撃点を残し、少なくとも4つの分割片からなる。ノッチなどのツールを製作した痕跡は見られないが、八尾南遺跡第6地点との技術的な関連性が窺われ興味深い。

石材の搬入状況は、サヌカイトの自然礫を地点内に搬入した形跡が希薄で、むしろ石核素材となる板状の剝片を持ち込んでいるようにみえる。この点は、接合資料の内容や、礫芯ともいえる石核の不在からも支持される。ただし、こうした石核の欠如は八尾南遺跡第6地点でも傾向として認められたことであり、結局は母岩に戻ることのない接合状況からの類推による。板状の剝片はナイフ形石器の素材生産をおこなうために搬入されているが、これを用いて「第1工程」を実施した可能性も残る。報告書の記載も加味するならば、接合資料JBH-49・同JBH-42などがこれにあたる。また、チャート製のナイフ形石器が1点認められ、同一石材の剝片・碎片など製作痕跡が皆無であることから、ツールにも若干の搬入品が含まれていることがわかる。

これらの項目をまとめると、89BH石器群の技術構造はきわめて単相的であることが知られる。板状の剝片を搬入し、それらを石核に転じてナイフ形石器の素材を生産する。そして、山形の打面調整を施すことで剝離した剝片を素材とし、ナイフ形石器を製作している。母岩から大形の剝片を得る工程なくしてはありえない石器群であり、これのみをもって全体像とみなすことはできない。

(2) 長原遺跡97-12次調査地出土の石器群(97AB)

長原遺跡東部地区(大阪市平野区長吉六反1-22)で検出された石器群である。1997年度の調査では合計395点の旧石器が出土し、14,761点の微細石器遺物が捕集されている。

接合資料は80例(JAB-1～JAB-80)あり、接合を試みた資料1,537点⁵⁾のうち、実際に接合したのは334点であるという。接合率は21.7%となり、これは八尾南遺跡第6地点のそれに近似する。ただし、資料の選択方式が異なることに注意が必要である。また、これらの接合資料はその内容から、母岩から直接剝片を剝離したもの(JAB-2・JAB-6・JAB-7・JAB-8・JAB-26・JAB-28・JAB-29・JAB-30・JAB-78など)と、大形・厚手の剝片からさらに剝片を得るもの(JAB-1・JAB-3・JAB-4・JAB-9・JAB-10・JAB-11・JAB-24・JAB-25など)とに大別できる。いいかえれば、母岩を搬入して剝片を剝離したものと、剝片のかたちで持ち込んで石器製作に供したものとが混在しているわけで、八尾南遺跡第6地点における接合資料のあり方に近い。このほか、チャートの接合資料もわずかながら認められる(JAB-79)。

これらの接合資料を中心に剝離技術を概観してみよう(図132)。まず注目されるのは、拳大程度のサヌカイト自然礫から縦長剝片を連続剝離した接合資料(JAB-2・JAB-6・JAB-7・JAB-8・JAB-29・JAB-30)の存在であろう。内容を要約すると、自然礫の1端に打面形成後、打面再生・打面調整を

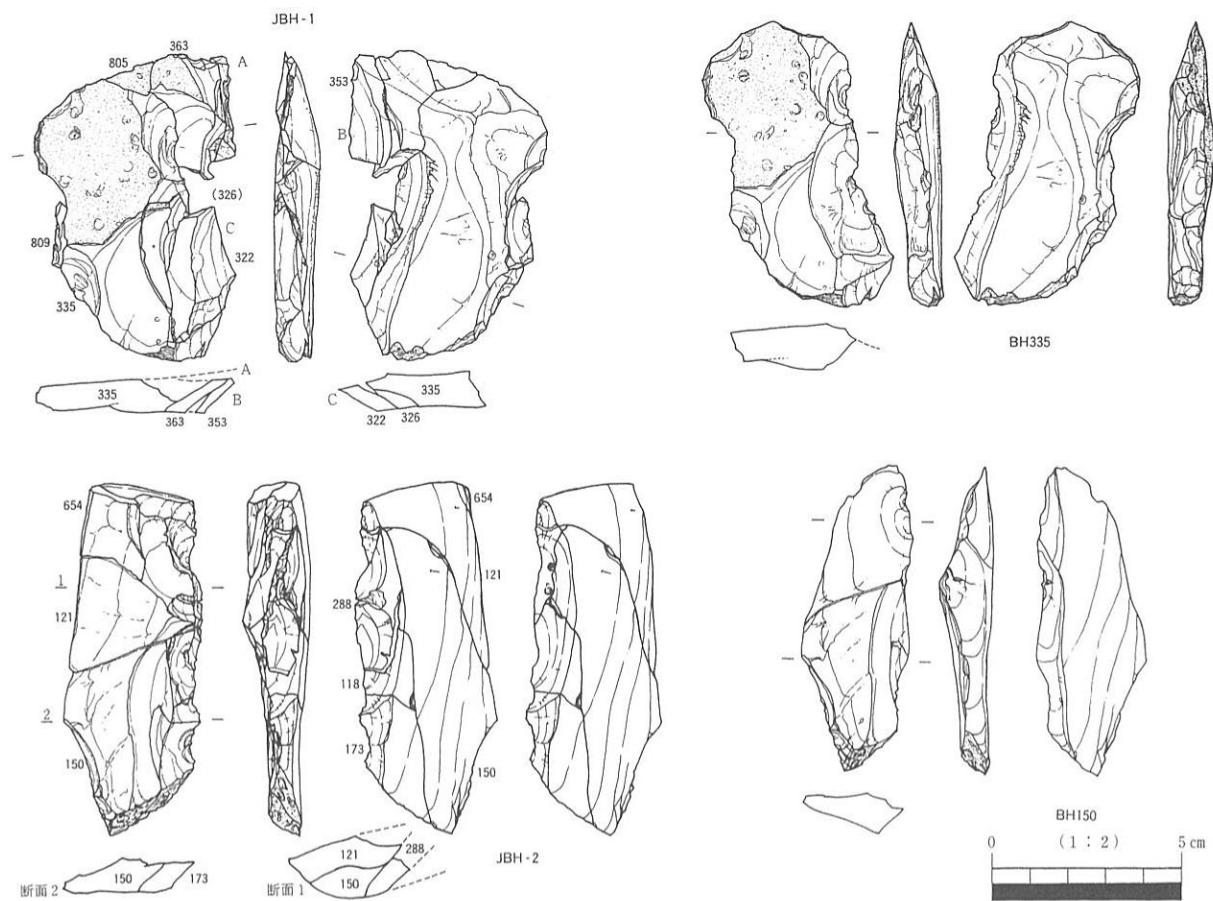


図130 NG89BH次石器群の接合資料

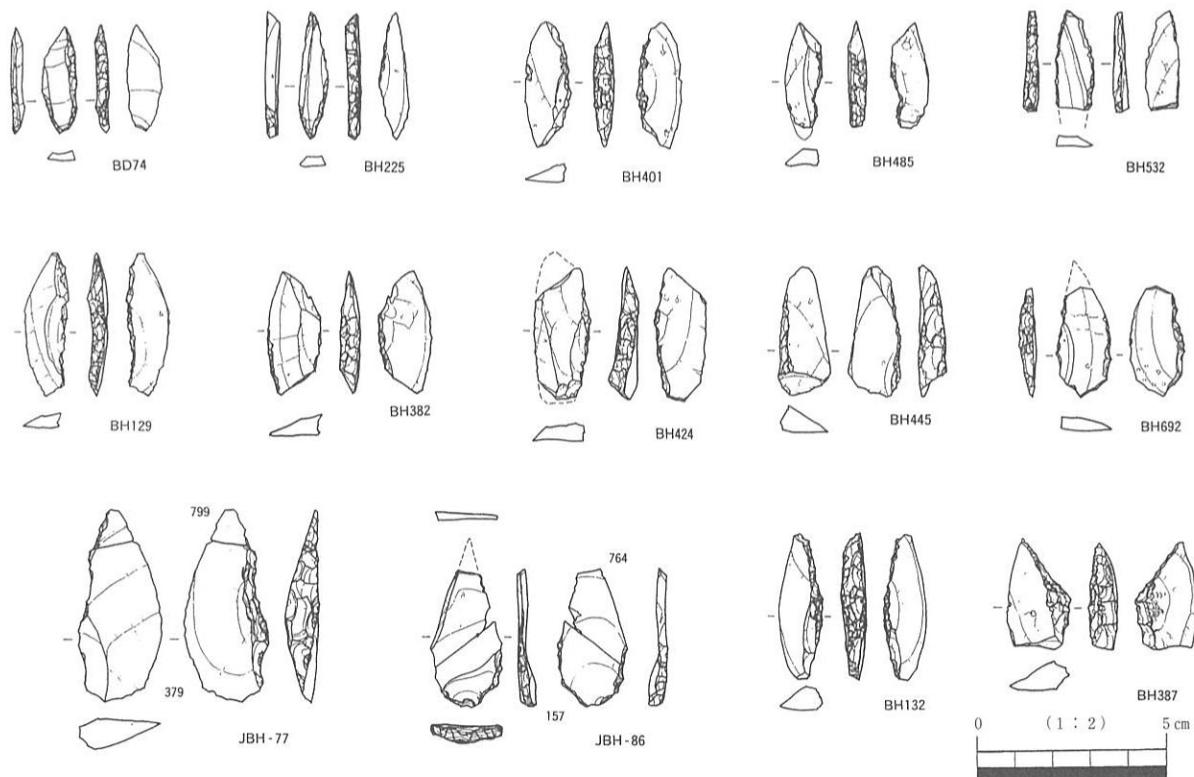


図131 NG89BH次石器群のナイフ形石器

繰り返して幅広～縦長の剝片を得たもので、単設・両設打面の両者がある。6例とも礫芯となる石核をもち、剝離開始から石核放棄までの作業を遺跡内でおこなっている。なお、JAB-2・JAB-8はナイフ形石器を含み、JAB-6は一部の剝片をやはり縦長剝片の石核に用いている。

また、大形の剝片を石核として同様の作業をおこなった接合資料もあり、その証拠として挙げられるのがJAB-1・JAB-3・JAB-11・JAB-26である。厚手・大形剝片の側面に作業面を設け、平滑な石核素材面（ポジティブ面の場合もある）と作業面との間に生じた稜線をガイドとして剝片を得ている。JAB-1以外は石核に剝片が接合した状況を見せ、また石核素材の両端に打面を併設している。

その一方で、大形剝片のポジティブ面側に作業面を設け、剝片を連続剝離して横剥ぎナイフ形石器を作成した接合資料も認められる（JAB-4・JAB-5・JAB-9・JAB-10・JAB-13・JAB-14・JAB-19）。とくにJAB-4は瀬戸内技法に類似の横剥ぎ技術でナイフ形石器を作成したのち、縦長剝片を連続剝離している。剝離作業の前半は板状剝片の打面側に作業面を設け、ポジティブ面を帯状に付着させた横長の剝片を得ており、これがナイフ形石器の素材となる。これに続く縦長剝片の剝離では、石核の左右側面が打面となる。横剥ぎ時の作業面とポジティブ面との間に走る稜線をとり込むかたちで剝離が進行し、この稜線の消失後は先行剝離の稜線をガイドとしている。最後に残る石核は著しく小形化し、剝離余地もほぼ失われている。

ナイフ形石器は46点出土している（図132）。このうち、横長の剝片を素材とした例は34点、縦長剝片を用いた例は10点となる。後者はいうまでもなく拳大程度の自然礫から剝離した素材を利用したもので、一部は接合資料に含まれる。打面を一部残して基部とし、1側縁ないしは2側縁に調整を施して先細りの形態に仕上げている。刃面となるのは先行剝離面・石核素材面であるが、断面形は三角形～四角形と変異に富む。一方、横剥ぎナイフ形石器は国府型に類似の中・大形品（おもに1側縁加工）と、切出形を含む2側縁加工および1側縁加工の小形品からなる⁶⁾。そのバリエーションは報告書の記載があるので詳述しないが、八尾南遺跡第6地点や89BH石器群には含まれない大形品が注目される。これらは搬入品とされるが、背部整形の状況を示す接合資料も知られている（JAB-15・JAB-18）。また、剝片との接合資料では必ずしも打面を山形とせず、打撃点を左右に移動させつつ得た剝片を素材とした例もある（JAB-13・JAB-14・JAB-19・JAB-22）。

ところで、筆者の実見では分割剝片を2例確認した（JAB-36・JAB-37）。これらについてはすでに意図的な分割の可能性が指摘されている（絹川編 2000 P.225）。JAB-36は厚手・大形の横長剝片を背面からの打撃で分割したもので、腹面側には打撃クラックが点在している（図133）。また、同面のポジティブ・バルブ端部には擦過痕も見られ、背面には放射状をなす毛細管状の亀裂が顕著である。報告書の記載によればAB379・583が「細部調整剝片」、AB740が「微細剝離痕剝片」であるという。このうち、AB583は腹面側打点部をとり込んだ分割片で、片側縁に2次加工を施して凹形の刃部を作りだしている。JAB-37も背面側からの打撃で分割したもので、同面には打撃クラックが点在する。素材剝片の打面部は未接合である。X字状の折れ面はポジティブ・バルブの中央部で交差し、打撃点の直下で生じた破砕が空白部として残っている。分割片AB600が「細部調整剝片」となるが、これはポジティブ面側に凹形の2次加工を施したもので、JAB-36に含まれるAB583に酷似する。八尾南遺跡第6地点の接合資料に含まれるノッチとも何ら変わることろがなく、分割技術とこれらの石器との関わりを窺わせている。

原材の搬入状況は、自然礫と厚手・大形の剝片での持ち込みとが認められる。前者はおもに拳大のやや細長い礫が主体で、縦長剝片の剝離に利用している。その一方で長さ15cm、幅5cm程度のサヌカイト

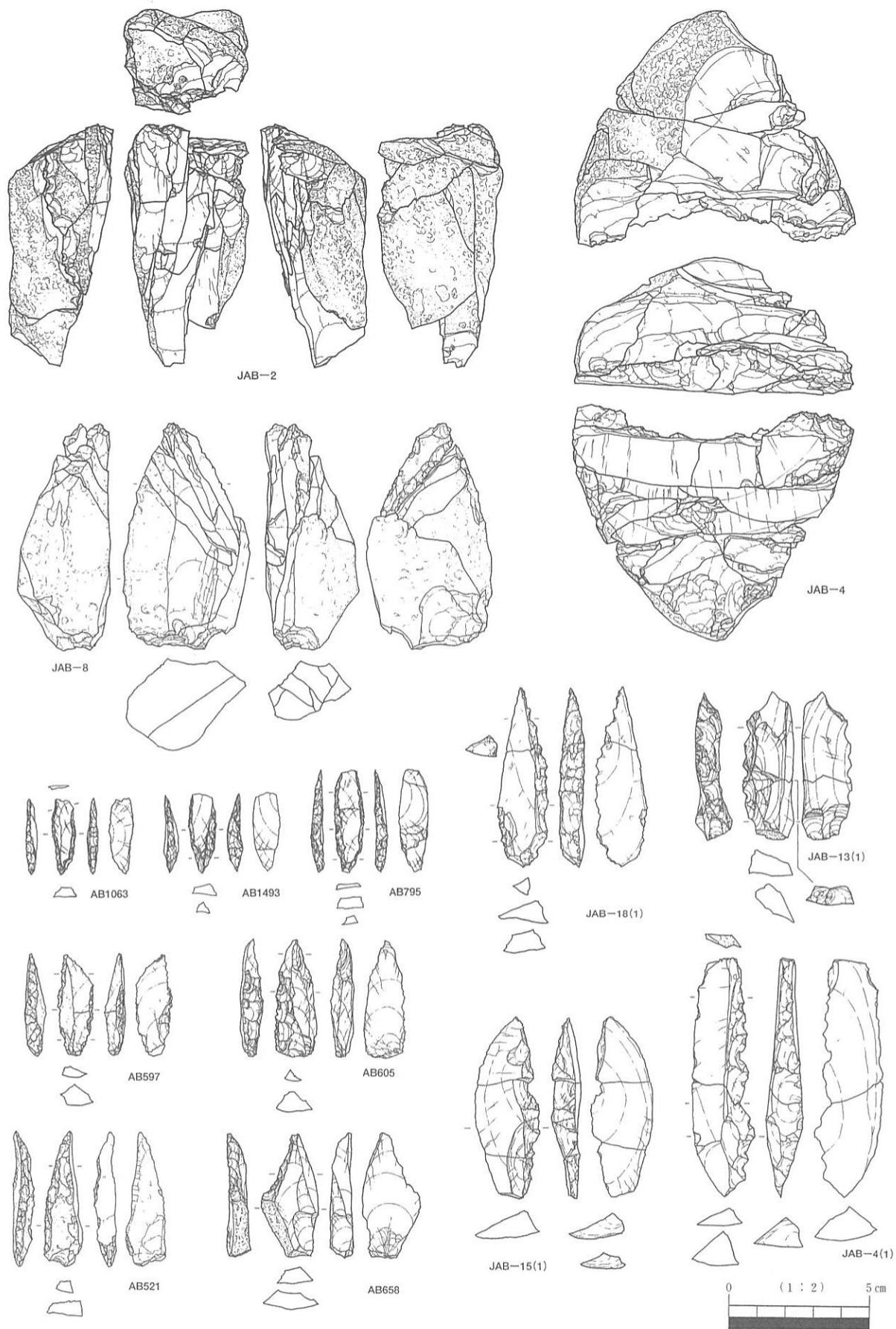


図132 NG97AB次石器群の接合資料・ナイフ形石器

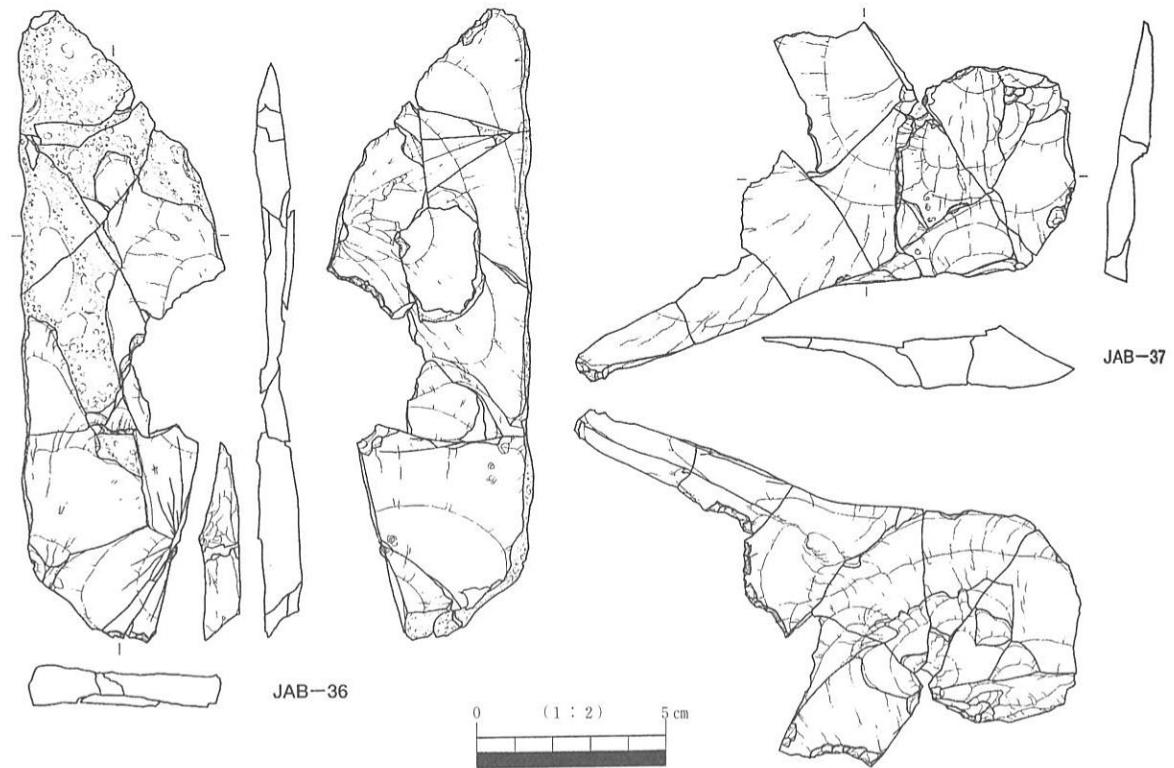


図133 NG97AB次石器群の分割剝片

礫を搬入した形跡もあり(JAB-78)、石核AB409の存在から遺跡内で消費を終えたことが明らかである。一部に剝離痕を残したサスカイト礫(AB746)も出土しており、相当数の母岩が持ち込まれたことを物語っている。

大形剝片は接合資料というかたちで遺存しており、互いに接合しあう例は皆無である。消費が進行しているので本来の大きさは不明確だが、例えばJAB-4の厚さは5cmに近い。JAB-10では厚さ約2cm、JAB-26では約3cmとまちまちであるが、いずれにせよ拳大程度の母岩から割りとれる剝片の厚さではない。先のサスカイト礫より大形の母岩を輪切りにするかたちで剝離したものを、自然礫と一緒に搬入したのであろうか。それは先々での利用をも考慮した搬入形態であるらしく、石理に沿う平滑な剝離面をもつ「板材」が、横剥ぎ・縦剥ぎの両方で有用であったものと考えられる。

97AB石器群の様相は単純ではない。原材は自然礫か大形の剝片で搬入されるが、前者はおもに縦長剝片の剝離に、後者は縦剥ぎ・横剥ぎの両者に用いられる。同じ接合資料の中で両者が共存することもあり、大小とり混ぜたナイフ形石器の素材を生産している。これに分割剝片が加わり、ノッチを製作している。89BH石器群とは対照的な様相を見せており、むしろ製作されるツールの種類に応じて母岩消費のバリエーションが増える点は八尾南遺跡第6地点と共通している。

4 比較・対照

(1)出土層準

これら2石器群と八尾南遺跡第6地点との類似点・相違点を整理してみよう。まず、97AB石器群とは分割剝片とノッチの実在が、また89BH石器群とはおもに小形・柳葉形ナイフ形石器の大きさ・形状が類似点として挙げられる。しかしながら、その他の様相は著しく異なっている。とくに、97AB石器

群では拳大程度のサヌカイト自然礫から剥離した縦長剝片を素材とし、基部～1側縁に調整を施したナイフ形石器が出土しているが、これは八尾南遺跡第6地点では認められない要素である。また、大形の横剥ぎナイフ形石器と縦長剝片とが同一母岩（正確には同じ石核素材）中で共存しており、画然と区別できないのも特徴である。一方、89BH石器群は様相が単純で、八尾南遺跡第6地点とは一見異質であるように見える。このような、部分的にはよく類似してはいるが全体像として著しく異なっている状況をいかに理解すべきであろうか。

地理的環境を見ると、3地点はきわめて近接した位置関係にある。いずれの地点でも水摩した拳大～幼児頭大のサヌカイト礫を用いており、自然面はアバタ状の浅い凹みが部分的に残るもの、細かい爪形クラックで覆われている。近傍の大和川水系（古長瀬川か）で採集したものと想定するならば、地点間で石材へのアクセス条件が著しく異なっていたとはまず考えがたい。したがって、内容差は帰属時期を異にするためか、一定の期間内におけるヴァリエーションであるかのどちらかであろう。後者の考え方を採択する場合は、変異の背景を明快に説明する必要がある。

そこで、まず各地点の出土層準を検討する。八尾南遺跡第6地点は第11層（シルト質微粘性土、シルト質粘土：層厚約10～20cm）の中心部に石器群が包含されており、石器は同層の上部～下部にかけて出土したという（山田編 1993）。11層は上位からA～C層に細分され、11B層からは微量の「大山ホーキ火山灰」が検出された（No.7 試料）。AT火山灰はその直下、11C層において濃集が認められ（No.8 試料）、降灰層準と考えられるという。したがって、これらの事実からは石器群がAT火山灰の上位にあり、大山ホーキ火山灰の検出層準から多く出土したことになる。なお、11層は長原遺跡の13層に対応する。

長原遺跡89-37次調査地では、NG12層および同12/13～13層帶（層厚約15～25cm）から石器群が出土している。これを標準層序に戻すと、大山系火山灰はNG13A層に、ATはNG13B ii 層に対比できる。12/13層漸移帶は土壤化が著しく、下位にある13A層との層界が不明瞭であるという。13A層には「大山系火山灰」がごく微量含まれているといい（檀原 1997）、89BH石器群もこれに近い層準から出土している⁷⁾。AT上位であるのは確実といえるが、13A層中の火山灰との関係はやや不明確である。なお、この火山灰は別に「阪手火山灰」とも呼ばれており、ごく微量の検出ではあるが八尾南遺跡第6地点の11B層に対比しうる。その点では、第6地点の石器群とは大きな時期差を認めがたい。

長原遺跡97-12次調査地でも、RK12/13層漸移帶の発達により、下位の13AB層（石器包含層、細別困難からAB層と一括）が搅乱を受けている。その一方で、隣接する97-52次調査地ではRK13層が厚く堆積しており、RK13B i 層上面でナイフ形石器AK403が出土している。97AB石器群の出土層準はAK403の出土状況から想定したもので⁸⁾、それによれば「阪手火山灰」の下位、RK13B i 層上面に比定できるという。この見解を支持するならば、97AB石器群はATの上位にあって「阪手火山灰」の降灰以前までの時間帯に帰属することになるが、前述の2石器群との前後関係は確定しない。

（2）原材料の搬入と技術的変異

各石器群の出土層準を検討してみたが、97AB石器群が他の石器群に先行する可能性を一部に残しつつも、大枠ではAT火山灰の降下～「阪手火山灰」の降灰前後にかけて営まれた地点であることが了解される。むしろ現状においては、例えば「瀬戸内技法の崩壊過程」というシナリオに則った変遷観を描くよりは、互いに近接していながらも内容を異にする石器群を、それら全体として俯瞰し互いに関連づける試みも重要である。3つの石器群のうち、内容が単相的であって理解が容易なのは89BH石器群で

ある。八尾南遺跡第6地点と97AB石器群は内容が複雑で、前者ではナイフ形石器と削器類の製作過程が、また後者では縦剥ぎと横剥ぎが一体化している。こうした変異は地点を違えても現実にありうるところのが自然であろう。視点が主觀的かつ恣意的になる点に抵抗も覚えるが、3者を原材搬入の状況と石器製作技術の関係から対比すると次の通りとなる。

端的にいって、原材を自然礫+大形剝片というかたちで搬入した地点（八尾南遺跡第6地点・NG97-12次調査地）では製作技術のヴァリエーションが大きくなる。これにはふたつの意味がある。ひとつは異なる意図が同じ母岩の中で共存することで、もうひとつはほぼ似通った意図を複数の技術（例えば縦剥ぎと横剥ぎ）で表現することである。後者においても同一母岩内の共存は起こりうるが、複数の技術が選択されるのは持ち込んだ原材の形態に応じたものとなりやすい⁹⁾。つまり、技術が変異に富むというのは、必要な剝片を得る可能性があらかじめ限定されていないということである（1器種=1技術という観念の解消）。

対して、原材の搬入形態が剝片に限られるときはナイフ形石器の製作が作業の中心となる。先の謂いでは作業目的が限定されるうえに、採られる技術もある程度限られてくるわけである。しかし、ナイフ形石器にも大小2群の共伴が明確化したことからも（97AB石器群）、様相は必ずしも単純ではない。したがって、89BH石器群がそれのみで全体像であるとは考えられず、これに母岩の搬入→消費によって生じる変異を加味する必要がある。要するに、89BH石器群の内容を補う要素は何かが問題となるが、これを明確な像としてイメージするのは難しい。ただ、参考となるのはほぼ同じ地理的条件下にあって、しかもやや異なる様相を見せている隣接の石器群であろう。

詳細は述べなかったが、NG12/13層帯から出土した88AB（NG88-29次調査地）・88AC（同88-37調査地）・88AE（同88-69調査地）の石器群を比較した論考がある（絹川・趙・清水 1995）。それによれば、石器製作の各段階で生じた剝離物（PG：プロダクト・グループ1～5）の分析を通じ、各地点あるいは石器密集部で主体となる作業が異なっている。すなわち、原材を剝片で搬入し、おもに目的剝離（PG 3 b段階）の作業が中心となる88AB石器群と、自然礫で搬入して石器生産工程の初期作業（PG 2・3a段階）を中心とする88AC石器群、そして自然礫・剝片で持ち込み全般的に活発な石器製作をおこなった88AE石器群とを区別できるという。だが、実際に自然礫が遺存していたのは88AE石器群のみ（小礫AE374）で、88AC石器群に原石が持ち込まれた積極的な証拠を欠いているように思われる。母岩に復する接合資料を見ないこと、礫芯となる石核が皆無であることからも、おもな搬入形態は大形の剝片であったものと考えられる。いずれの石器群でもこれらの剝片を石核に転じ、剝片を剝離してナイフ形石器を作っているが、出土点数は少ない。なお、88AE石器群には分割技術の接合資料（JAE-8②）があり¹⁰⁾、この点では八尾南遺跡第6地点や89BH・97AB石器群と共通する。

88AB～88AE石器群は原材の搬入形態において、89BH石器群と類似していることが予測できる。厳密には山形の打面調整を施して小形ナイフ形石器の素材を得る後者が異質にも見えるが、石器製作の背景に大きな差は認められない。そして、これらに自然礫を用いた石器製作の痕跡を加えたのが八尾南遺跡第6地点・97AB石器群である。

八尾南遺跡第6地点では搬入した剝片を石核に用い、山形の打面調整を施して小形・柳葉形のナイフ形石器を製作している（剝離技術B）。より単純な剝離技術Aがこれに加わるが、後者は母岩にほぼ復元可能な接合資料の中に含まれており、89BH石器群に出現する余地はない。両石器群はある意図（小形ナイフ形石器の製作）を共有しながらも、その意図を実体化するうえで採りうる技術のヴァリエーション

表85 石器群の内容

		八尾南 6	NG97AB	NG89BH	NG88AB	NG88AC	NG88AE
搬入形態	自然礫	○	○				△
	剥 片	○	○	○	○	○	○
	ツール	○	○	○			
母岩の分割*		○	○				
目的剝離	縦剥ぎ		○				
	横剥ぎ	○	○	○	○	○	○
Knの製作	小形	○	○	○	○	○	○
	中・大形		○				
分割技術		○	○	○		○	
ノッチ		○	○				△

*は母岩から直接剝片を得る過程を示す。

○は接合状況から明らかな要素を、△はその可能性を示す。

ンに差があったのである。また、97AB石器群でも大形の剝片を石核素材とするが、大別して縦剥ぎ・横剥ぎの両者に併用している。これはほぼ類似する意図を複数の手段で実体化したもので、拳大程度の自然礫を搬入→縦長剝片の剝離という過程が存在したがゆえに、大形剝片を用いた横剥ぎとの一体化が生じたと解釈できる。こうした相違点を地点間の有機的関係の反映ととらえるならば、ある一定期間内における石器群の変異とみなすことができよう。そして、これを裏付けるのが分割技術の実在である。石器群間でさまざまな要素が現れたり消えたりする中で、分割技術はほぼ一定して石器群の構成要素となっている(表85)。これを地点間の有機的関係を示す証左とみるならば、それがいかなる関係かは自ずと限定されてくる。すなわち、八尾南遺跡第6地点・97AB石器群で認められた技術的変異は、残余の石器群におけるそれを包括するものと思われる。

5 まとめ

前章で述べた点をまとめると次の通りとなる。長原遺跡の12/13層帶(AT降灰以後～「阪手火山灰」の降下前後)から出土する石器群(89BH・97AB・88AB・88AC・89AE)と八尾南遺跡第6地点の石器群は、原材の搬入状況とそれに起因する技術的なヴァリエーションのあり方から、2つの様相に大別できることが判明した。ひとつは原材を自然礫・剝片で搬入し、技術的な変異が多岐にわたる様相(八尾南遺跡第6地点・97AB次石器群)で、もうひとつはおもに剝片で持ち込み、作業の内容が比較的単純な様相(89AB・88AB・88AC・89AE石器群)である。なぜ2つの様相が現れたかは判然としないが、現状ではこれを時期差と理解するのではなく、全体像の一部が個々の石器群に表現されているとみるのが妥当であろう。全体像に近いのは前者であるが、これも原材採集地点における石器製作の様相が不明確な今、やはり部分的な姿であることに変わりはない。

最後に粟生間谷遺跡との関連性について考えておく。現状では、地理的な隔たりのある長原・八尾南遺跡との直接的な関係を測れる状況にはないが、サヌカイトの河床礫を石器製作に用いているなど、原材の搬出入について何らかの関連性をもつことが予想される。一概に消費地といっても、近傍での原材確保が容易であったとみられる長原・八尾南遺跡と、その地域からも離れ、チャートの分布域(丹波帶)からもやや隔たった北摂地域の石器群とでは、帰属時期がほぼ同一であっても異なる遺跡群が形成された可能性が高い。それはひとえに原材へのアクセス条件と、それを受け必然的に生じる技術的変異によるもので、単純な対比は不可能である。「消費地」として一括せず、石材が採集可能な地域と、そ

うでない地域とに分布する石器群の様相を分けて考える必要がある。

また、原材料を搬入することから石器製作が展開する場と、そもそも石材の搬入がほぼありえず、しかも原材料を潤沢に確保できる場(いわゆる原産地)とでは、技術的な変異のあり方自体が同一であるとは限らない。この点については別途分析を要するであろう。

なお、執筆に際しては伊藤栄二氏、絹川一徳氏、新海正博氏、手島美香氏、野口 淳氏、森先一貴氏、森屋美佐子氏、山田隆一氏のご教示・ご協力を得た。文末ながら記して謝したいと思います。

(森川 実)

註

- 1) 分割片数のカウントには空白部分も含めている。
- 2) 接合資料に含まれる剝片の分類法については、付編「八尾南遺跡第6地点の接合資料」を参照されたい。
- 3) 報告書の表26-11～26-13(趙編 1997)より集計した。
- 4) 報告者は剥離面の肌理・流理構造・風化の特徴から、母岩を26種に分類している(p.109)。
- 5) 単純最大長1.5cm以上の石器遺物1,012点と、単純最大長1.0cm以上の剝片525点を合わせた。
- 6) 報告書では3cm未満を「小型」、4.5cm以上を「大型」とし、その中間を「中型」としている(絹川編 2000 P.150)。
- 7) なお、隣接するNG89-22調査地における火山灰分析によると、試料No.18～20にかけて「大山系火山灰」が、同No.14～35にATが含まれている。後者はU26・U27にて濃集が確認でき、降灰層準であるという(檀原 1997)。
- 8) AK403の出土層準より上位で採取された試料No.8～11に、屈折率1.496～1.501の火山灰が含まれているという。報告者はこれを「阪手火山灰」に比定している(小倉・絹川 2000)。
- 9) これに近いのは異種石材間における技術的な表現形の違いであろうが、ここではとくに触れない。
- 10) JAE-8②の一部をなすAE404は素材の打面縁に凹形の剥離痕をとどめている。ノッチの刃部とみることもできるが、ポジティブ面との切り合いが不明瞭である。

参考文献

- 小倉 徹・絹川一徳 2000 「第2節 火山灰分析」『大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ pp.135-138
(財) 大阪市文化財協会
- 絹川一徳編 2000 『大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ (財) 大阪市文化財協会
- 絹川一徳・趙哲済・清水和明 1995 「第1節 剝片の属性分析」『大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ
pp.325-366 (財) 大阪市文化財協会
- 檀原 徹 1997 「第3節 火山灰層・火山灰濃集層準」『大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ pp.19-24
(財) 大阪市文化財協会
- 地学団体研究会大阪支部編 1999 『大地のおいたち 神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類』 築地書館
- 趙哲済 1994 「長原遺跡における旧石器の現状-特に層序と古地理について-」『大阪市文和財論集』 pp.73-84 (財)
大阪市文化財協会
- 趙哲済・京嶋 覚編 1995 大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ (財) 大阪市文化財協会
- 趙哲済編 1997 『大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ (財) 大阪市文化財協会
- 山田隆一編 1993 『八尾南遺跡Ⅱ 旧石器出土第6地点の調査』 大阪府教育委員会